



元号で考える近代日本 「優しく正しい」平成時代

いおきべ まこと
五百旗頭 真
(アジア調査会会長)

元号に示された時代が、実質的な時代区分に合致するとは限らないし、元号に込められた時代への期待がその通り成就することはむしろまれである。とはいえ、元号に示された時代を考えることは、日本人のみに許される特権でもある。

坂を登る明治

近代日本の四つの元号のうち「明治」がその言葉のイメージにもっとも近い典型的な国家興隆の時代であった。

「黒船」に国禁を破られた衝撃と危機感が新時代をつくる

マグマを成し、長く続いた徳川の世を揺らした。ただ幕府も討幕派も、西洋列強の介入を警戒し、内戦を限定しつつ新政府を創出した。帝国主義時代の外敵に耐える中央集権制が課題であり、西洋文明の学習と近代化のスピードが日清・日露の勝利を可能にした。「坂の上の雲」と歴史作家に描かれた時代を経て、日本は非西洋社会の中で近代化の先頭を走る立憲君主制の国となった。それを反映して、明治天皇はヒゲをたくわえた洋服姿、それも軍服姿がよく似合った。

「大正」は踊り場で方向を考え直す局面となった。第一



この時「平成流」の天皇像が生まれた。普賢岳噴火の避難者に、お見舞いの言葉をかける天皇、皇后両陛下＝長崎県島原市の島原第一小学校で1991年7月10日、関口純撮影

次世界大戦という国際動乱と関東大震災という巨大災害に見舞われる中で、経済再建と政党政治への移行が問われた。が、天皇の病状悪化により、それに応えるいとまはなかった。「大正」という志の高い名称には遠い時代となった。

「昭和」はピークから始まり、谷底に落ちた後、もう一度別のピークに登るV字形の歴史をたどった。第一次世界大戦でも勝者の席についた日本は、海外に広大な支配地域を持つアジア太平洋の帝国であった。そこから出発した「昭和」であったが、強みであった軍事力によって転落する。満州事変以降の対外戦争の常習化と国内における軍部支配の連動が世界戦争へと日本を突き進ませた。昭和20年の敗戦により、海外領土をすべて失い、主要都市は廃虚となり、国民生活は衣食住にも事欠く事態になった。

再生する昭和

「昭和」はしかし、どん底から再生した。奇跡の復興と高度経済成長を遂げ、経済主義の高き尾根筋に登って「昭和」は終わった。

昭和天皇の業績を一つあげるとすれば、戦争を終える「聖断」であろう。陸軍がなお本土決戦を強硬に主張する中、天皇は「復興の光明」を口にして、武器を置く判断



五百旗頭（いおきべ・まこと）

1943年生まれ。京大大学院修了。法学博士。専攻は日本政治外交史。米ハーバード大客員研究員、神戸大教授、防衛大学校長などを経て、2012年から熊本県立大学理事長。この間、東日本大震災に伴う政府の復興構想会議議長などを歴任。アジア・太平洋賞選考委員長。

を示した。何も無い廃墟はいきよの東京であったが、殺りくの時代を終え、家族のために働けるようになった国民であった。

20世紀の歴史にあって、君主のもとで戦争を始めて敗れた国は、日本以外すべて君主制が廃された。1。日本の場合も、もし昭和天皇が積極的な戦争政策の推進者であったなら、戦後に天皇制は残らなかったであろう。平和志向の強い天皇であることがグレート駐日大使らによって米国内政府内で説かれ、決定を先送りしていたところに、聖断による平和が届いた。「昭和」の元号はその前半の戦争時代には似合わないが、平和的再生を遂げた戦後には適格的といえよう。

冷戦終結とともに「昭和」は終わり、「平成」となった。

その時期、日本経済はピークにあった。世界第2の経済大国であり、断然たる産業競争力を誇った。

災厄と闘う平成

「平成」の時代は平でもなく、成でもなかった。災厄が冷戦後の日本に次々襲いかかる。まずバブルがはじけ、日本経済は「失われた20年」に沈淪した。

冷戦後の世界では民族紛争、宗教紛争が頻発し、21世紀に入るとイスラム過激派の自爆テロが襲い、2010年代にはついに「イスラム国」(IS)なる国家を呼号するに至った。北朝鮮が核とミサイルをかざして暴れ、急速な大国化に跳ぶ中国が海洋支配を拡大して国際秩序を脅した。

大自然も、阪神大震災、東日本大震災、熊本地震、さらには地球温暖化に伴う豪雨災害も続き、日本列島は大災害の時代真ただ中にある。つまり、日本経済も国際政治も、自然災害も、束になって平成の日本に襲いかかっている。では、よいことのない「平成」か。

とんでもない。よいこともたくさんある。乱れた世界にあって、日本は平和と安定を保っている。周辺国の暴虐に対して、日本は猛りたちもしなければ、敗北主義に陥りもしない。静かに自助努力を強化しつつ、多くの国々と連携して抑制に努めている。日米同盟を60年以上も大

切にし、穏やかに国際秩序を支えている。

また、阪神大震災以降の相次ぐ災害の中で、着実に社会的対応力を高めている。東日本大震災に対する安全なまちづくりの復興水準は史上最高であり、熊本地震にも多様な支援が届けられた。

人に優しい生活文化は、要援護者や障害者にも及び、パラリンピックへの社会的関心も高まっている。少なくとも国民が100歳まで生きる時代を迎えつつある。

平成の両陛下は、この時代の精神に深く関与しておられる。雲仙・普賢岳の被災地を訪ねた11月22日以来、両陛下は避難所の床に膝をつき、被災者と同じ高さになつて手を取られる。静かな「国の象徴」にとどまらず、「国民統合の象徴」を行動されるのである。被災地でも、あの戦争への慰霊の旅にあつても、深く長く礼をされる両陛下の姿は、平成の日本における精神性を守る営みではないだろうか。「平成」は国家興隆のめたい時代ではないが、優しく正しい時代として、ひそやかに誇ることができると思われる。

◇明治150年の歩み

多少冷笑的に世の中を見ていた永井荷風。「或(ある)年大地震(にわか)にゆらめき/火は都を焼きぬ」と、関東大震災(1923年)で失われた風景をうたったその名も「震災」という詩がある。「われは明治の兒ならずや/去りし明治の兒ならずや」の言葉は、逝きし明治への哀切となっている。そして平成が終わりを告げようとしている。明治150年は日本が国際舞台に登場した歩みでもある。平成という時代はどう位置づけられるのか。

■ ことは

◇ 1 廃された君主制

第一次世界大戦（1914～18年）では敗北したドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国などの君主制の国々が滅びた。また、連合国側としてドイツなどと戦ったロシア帝国は17年の2月革命で崩壊した。戦争が直接の原因ではないが、列強の進出で半植民地化していた中国の清国は12年に倒れた。

◇ 2 普賢岳訪問

1990年秋、長崎県島原半島雲仙山系の普賢岳が噴火した。91年5月以降、土石流や火砕流が頻発し多数の死者・行方不明者を出し、最大996世帯3904人が仮設住宅に入居した。そうしたなか、天皇、皇后両陛下は同年7月に被災地を訪問。避難所の体育館では、被災者に歩み寄ると腰を低くして語りかけた。その姿は、新聞・テレビを通じて国民の目に焼き付いた。「平成流」とも呼ばれる天皇像の原点となった。